

店舗建設に伴う

おきべ

意岐部遺跡第5次発掘調査報告書

2002.6

財団法人東大阪市文化財協会

店舗建設に伴う

おきべ

# 意岐部遺跡第5次発掘調査報告書



2002.6

財団法人東大阪市文化財協会

---

## 例 言

---

1. 本書は財団法人東大阪市文化財協会が実施した店舗建設に伴う意岐部遺跡第5次発掘調査の報告書である。
2. 本調査は株式会社山陽マルナカ（代表取締役・中山明憲氏）から依頼を受け、東大阪市西岩田3丁目113～121, 135, 956番地で、2000年4月26日～同5月31日まで現地調査を実施した。
3. 現地調査および整理作業にかかる費用は株式会社山陽マルナカが全額を負担した。
4. 本事業にかかる現地調査および本文の執筆は財団法人東大阪市文化財協会・井上伸一および別所秀高がこれを担当し、目次の項に分担を明記した。
5. 本書に掲載した水準高は東京湾中等潮位（T.P.）を、座標系は日本測地系（旧測地系）・平面直角座標第VI系を基準にした。
6. 現地調査にあたっては株式会社山陽マルナカ関係者各位の御理解と御協力を賜った。財団法人京都市文化財調査研究所・平尾政幸氏ならびに桜井市教育委員会・松宮昌樹氏からは出土土器について有益な御教示を得た。心より感謝いたします。また、現地調査および整理作業には以下の補助員が参加した（五十音順）。

梶浦泰久 橋田弥生 古藤貴洋 柴田由花子 東口一彦 山岡茂樹 山崎和子 山本健一郎  
山本賢治

---

## 目 次

---

第1章 はじめに一調査経過と調査方法一	(井上・別所) 1
第2章 意岐部遺跡と周辺諸遺跡の既調査成果	(井上・別所) 2
第3章 意岐部遺跡周辺の地形概観	(別所) 4
第4章 層 序	(別所) 5
第5章 遺 構	(別所) 15
第6章 遺 物	(井上) 33
第7章 意岐部遺跡第5次調査出土材の放射性炭素年代	(バリノ・サーヴェイ株式会社) 43

## 第1章 はじめに—調査経過と調査方法—

意岐部遺跡は近鉄奈良線八戸ノ里駅の北東800m、大阪府東大阪市新家、御野東、西岩田にかけて拡がっていると考えられている(東大阪市教育委員会1996)。今回行った意岐部遺跡第5次調査は、株式会社山陽マルナカが西岩田3丁目113~121、135、956番地で店舗建設を計画し(図1.1)、東大阪市教育委員会が同所で試掘調査を行ったところ地表下-1.4mで土師器の細片を少量含む遺物包含層が確認されたため、両者が事前協議を実施し、建設工事で破壊される予想される箇所について発掘調査を行うことで合意した。財団法人東大阪市文化財協会では株式会社山陽マルナカからの依頼を受け、1998年4月29日~同5月30日まで現地で発掘調査を実施した。また、調査終了後、2002年6月にかけて継続的に遺物整理作業を行った。

調査は新設建物建設範囲の西半部のうち点状に分布する基礎杭部分を線状に繋いだ8カ所のトレンチを設けて実施した(図1.2)。このうちA地区ではトレンチの大部分は1970年代まで存在した溜池部分に該当し、遺構や遺物を検出することができなかったため、南壁の断面を部分的に記載するに留めた。また、調査地西端の南北方向のトレンチと新設建物建設範囲の東半部の取り扱いについては、本調査期間中に既存建物の撤去工事が実施されたため、教育委員会がこれに対処した。

### 参考文献

東大阪市教育委員会 1997 「東大阪市内埋蔵文化財包蔵地・指定文化財分布図」



図1.1 調査地点と意岐部遺跡の既調査地点

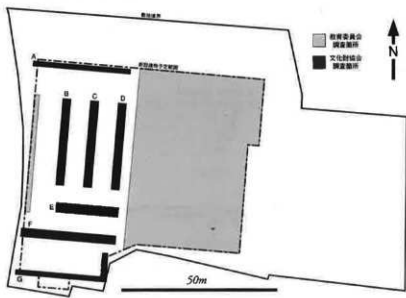


図1.2 店舗建設計画位置と本調査地点の地区割り

表2.1 意岐部遺跡調査一覧

調査年度	調査機関	調査地	発掘期間	調査面積	調査者	報告書名	
1	高円寺文化建設工事	東大阪市遺跡発掘調査会	1979.06.17~ 1979.05.12	200	西川田3丁目1111	ア・エ・エ株式会社	未発行
2	旧御野東手裏	東大阪市教育委員会	1980.01.05~ 1980.01.31		西岩田3丁目113、951		東大阪市教育委員会(1980)「東大阪市埋蔵文化財発掘調査報告書(1979年度)」
3	オゾン・アーク建設	財団法人東大阪市文化財協会	1986.08.15~ 1986.09.02	41	西岩田3丁目2714-6	シー・エ・エ建設株式会社	財団法人東大阪市文化財協会(1990)「東大阪市文化財発掘調査報告書」
4	旧御野東手裏	東大阪市教育委員会	1999.08.25~ 1999.12.09	259	御野東2丁目641-4		東大阪市教育委員会(2000)「東大阪市埋蔵文化財発掘調査報告書(1999年度)」
5	店舗建設	財団法人東大阪市文化財協会	2000.04.29~ 2000.05.31	466	西岩田3丁目113-121	株式会社山陽マルナカ	未発行

## 第2章 意岐部遺跡と周辺諸遺跡の既調査成果

意岐部遺跡は新家在住の故規矩一太郎氏が同所で所有していた田地で古式土師器や5世紀末頃の須恵器、9～10世紀ごろの土師器皿を採集していたことで、後に周知されるようになった（中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会1971）。1978年に実施された共同住宅建設工事に伴う調査から通算し、これまでに4回の調査が実施されている（表2.1, 図1.1）。

本調査地点の北側に隣接する第1次調査地点では互いに直交する南北方向と東西方向の数十条の6世紀頃の溝が検出されているようだ。第1次調査地点の東に位置する第2次調査地点では、「2次堆積層」と称される層準から須恵器や土師器、瓦器の破片が出土している（芋本・勝田1980）。本調査地点の北西250mの第3次調査地点では古墳時代庄内式期～布留式期や中世の遺構・遺物が（若松1998）、西150mの第4次調査地点では12～13世紀、10世紀、6世紀の遺構・遺物が検出されている（下村2000）。

いっぽう、意岐部遺跡周辺には多数の遺跡地が点在し（図2.2）、とくに近畿自動車道沿いの新家、西岩田、瓜生堂、巨摩庵寺、若江遺跡、若江北遺跡などでは比較的密度高く調査が実施されてきた。また、意岐部遺跡の北縁には暗峠越奈良街道があり、河内平野を横切るようにやや屈曲しながら東西方向にのびている。

意岐部遺跡の北西1.2kmに位置する西堤遺跡ではこれまでの調査で、古墳時代後期（5世紀後半）の須恵器や土師器、ウシ・ウマの骨、奈良～平安時代の銭貨、墨書須恵器、平安～鎌倉時代の道伏遺構などがみつまっている（下村1977, 勝田1999, 菅原1999）。

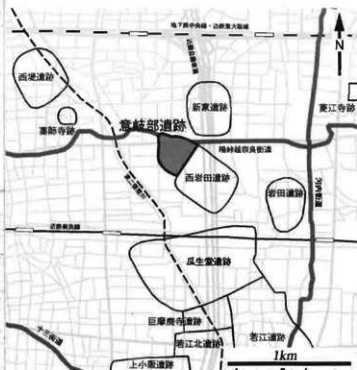


図2.1 意岐部遺跡の位置と周辺の遺跡分布

意岐部遺跡の北東500mに位置する新家遺跡では縄文時代晩期の堆積層で両殻合わせ正立状態のセタシジミが検出されており、当時周辺の水域では淡水が卓越していたことがうかがえる。また、古墳時代中期の流路と自然堤防、それらの上に形成された同時期の集落の痕跡、古代以降の耕作地跡などがみつまっている（大阪府教育委員会・大阪文化財センター1984a, 1984b, 1987, 1993）。さらに土壌を敷き詰めてその上に足場を設けた14世紀後半～15世紀初頭の遺構があり、「葦刈り取り場用足場」としての用途が推測されているが（若林1995）、検出地点が暗峠越奈良街道に近接していることから周辺増水時の同街道の迂回路、あるいは短期間機能した同街道そのものの可能性も考えられる。

意岐部遺跡の南東に隣接する西岩田遺跡では遺跡地を横切る弥生時代後期の流路と自然堤防があり、その上面では古墳時代前期および後期（5世紀後半）の遺構が形成されている。また、その自然堤防

直上では奈良時代の掘立柱建物群や井戸、自然堤防の後背地にあたる相対的に低い場所では古代以降の耕作地跡がみついている（大阪府教育委員会・大阪文化財センター1983）。

以上の意岐部遺跡と周辺の諸遺跡の成果を考慮すると、本調査地点でも弥生時代後期～古墳時代前期頃の流路や自然堤防が埋没していること、その上位に古墳時代以降の遺構が形成されていることが予想される。また、周辺の遺跡は古墳時代前期の漁撈具に関連する手網杵や櫂などの木製品や大型の土錘の出土数が、生駒山山麓域や平野部の大和川水系上流域の遺跡に比べて卓越していることも注目される。

#### 参考文献

- 芋本隆裕・勝田邦夫 1980 「東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要—1979年度—（東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報21）」、東大阪市教育委員会。
- 大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1983 「西岩田—近畿自動車道吹田天理線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—」
- 同 1984a 「新家（その2）—近畿自動車道吹田天理線建設に伴う発掘調査概要報告書—」
- 同 1984b 「新家（その3）—近畿自動車道吹田天理線建設に伴う発掘調査概要報告書—」
- 同 1987 「新家（その1）—近畿自動車道吹田天理線建設に伴う発掘調査概要報告書—」
- 同 1993 「新家（その5）—近畿自動車道吹田天理線大阪ジャンクション建設に伴う発掘調査概要報告書—」
- 勝田邦夫 1999 西堤遺跡第4次発掘調査概報。「埋蔵文化財発掘調査概報集—1998年度—」、財団法人東大阪市文化財協会、57-66。
- 下村晴文 1977 「村上学園校舎増築工事に伴う西堤遺跡調査概報」、東大阪市教育委員会。
- 菅原章太 1999 「学校法人村上学園東大阪高等学校体育館新築工事に伴う西堤遺跡第5次発掘調査報告書」、財団法人東大阪市文化財協会。
- 中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971 「西岩田遺跡—中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡調査概報」
- 若林邦彦 1995 「土俵」をめぐって。「新家遺跡第6次発掘調査報告書—大阪府道高速東大阪ジャンクション建設に伴う発掘調査—」、財団法人大阪府文化財調査研究センター、56-59。
- 若松博恵 1998 意岐部遺跡第3次発掘調査。「東大阪市文化財協会概報集—1997年度—」、1-12。
- 同 2000 意岐部遺跡第4次調査概報。「東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要—平成11年度—」、51-64。

### 第3章 意岐部遺跡周辺の地形概観

意岐部遺跡はこの河内平野の中央付近に埋没し、遺跡地付近の現標高は2.5～3.0mを測る。河内平野は大阪府の東部に広がり、地表面に緩やかな起伏をもつ沖積低地である。平野の西側と東側は隆起地塊である上町台地と生駒山地によって囲まれ、北は北摂丘陵、南は羽曳野丘陵へ続く。河内平野へ流入する主な水系には北東から流入する淀川と南東から流入する大和川があり、両河川は上町台地の北側で合流し大阪湾に注ぐ。現在の新大和川は河内平野を通らず直接大阪湾へ排水するよう1704年に開削されたもので、人工堤防で河道を固定された現在の長瀬川と玉串川はかつての大和川の名残りである。

河内平野の中央から北部にかけての帯は表層を構成する軟弱な梅田層(沖積中部泥層および沖積上部砂層相当)の圧密沈下や戦後の地下水過剰採取による地盤沈下が著しい。調査地点の北150mの旧意岐部小学校では1966～1996年の間に累積沈下量が約60cmに達している。さらに北の長田2丁目にある長田北公園では1958～1996年の間に約1.5mの累積沈下量が観測されており、同じ年から観測が始まった東大阪市西北部の他の観測地点でも同じ程度の累積沈下量が認められる(東大阪建設局下水道部1997)。これらの地点では1957年以前の沈下量が観測されていないことを考慮すると2m超の累積沈下量があると予想され、意岐部遺跡付近も同じ傾向があると考えられる。

1942年に撮影した空中写真を判読すると意岐部遺跡付近には、かつての流路跡と考えられる自然堤防状の高まりを観察することができる(図3.1)。この自然堤防は八尾市天王寺屋付近で分流した流路によって形成されたもので、意岐部遺跡を横切る流路跡をとくに「西岩田分流路」跡と称している。

西岩田分流路の上流側にある小阪合分流路では、弥生時代後期に開析谷が形成され、古墳時代前期には流路が放棄されていることが推測されている(松田2000)。若江遺跡や後述するように本調査地点では西岩田分流路に相当する流路堆積層から古墳時代前期の遺物が産出するが、それ以降の流路堆積層が見当たらず、本流路が放棄された時期についてはこれを支持している。1960年代まではこの自然堤防上には近世以前に遡ると考えられる集落や畑地が展開され相対的に低く、排水不良の後背湿地では水田が営まれていたが、第二寝屋川が開削され、大阪中央環状線が開通した1970年代以降は土地条件に関係なく急速に宅地化・商業地化がすすんだ。

#### 参考文献

東大阪建設局下水道部 1997「平成8年度一等水準基標改測点の記」

松田順一郎 2000 小阪合遺跡における弥生時代中期～古代の河川堆積作用と地形発達。財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第51集「小阪合遺跡」, 259-276。

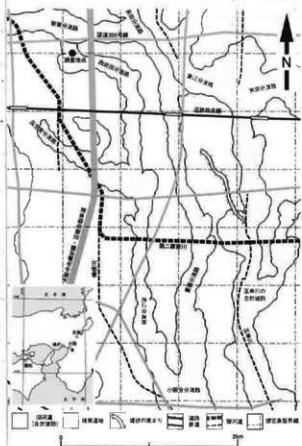


図3.1 調査地点周辺の地形概観

## 第4章 層序

意岐部遺跡第5次調査では現地表から標高0.6m付近(層厚約2m)までの地層を観察することができ、このうち調査の対象としたのはおおむね標高1.2～0.8mの考古遺物を含む層序である。

V層は概して黄白色～白色を呈し、トラフ型斜交層理および水平層理をなす礫質砂。細礫～10mm以下の中礫がよく目立つ。図3.1に示した西岩田分流域を構成する砂層と考えられる。層理面の最大傾斜方向はA, B～D, E, G地区それぞれで北北東、北北西～北東、西北西、北～西北西に卓越し、おおむね北方向の古流向が推測される。後世にしばしば人為的に削平されているものの、本層上部には土壤形成が認められ、一時的に陸化していたことがうかがえる。また、本層上部には古墳時代前期の土器を伴うピットや土壌などの遺構を確認できた(古墳時代前期第II遺構面)。本層準からの考古遺物の産出はなかったが、周辺の調査地点では弥生時代後期～古墳時代前期の土器や木製品が産出している。

IV層は緑灰色を呈するシルト～極細粒砂～極細粒砂～細粒砂の層理ないしは葉理の互層。A, DおよびC地区ではさらに上位にトラフ型斜交層理ないしは水平層理をなす粗粒砂～細粒砂が被い、上方粗粒化のサクセションを示している。洪水氾濫によって形成されたと推測される。場所によっては上部に土壤形成がみられる。水平面での確認を怠ったが、垂直断面ではさらにもう1面の古墳時代前期の遺構面を確認できた(古墳時代前期第I遺構面)。これら土壤や遺構面はII層形成時に大部分が削平されている。本層準からは古墳時代前期の土器が産出した。なお、AおよびE地区では本層準下部に人為的に掻き混ぜられた細礫混じり砂質泥が認められる。

III層は灰色を呈する泥混じり粗粒砂～細粒砂。しばしば団粒構造が認められる。本層準の拡がりはC地区のみで確認できた。下位のIV層を母材にして、人為的に掻き混ぜて作られた畑作土層と考えられる。水平面では本層準に対応する畑の畝は検出されなかったが、F地区の東半部では北西～南東方向にのびる溝を3条検出しており、畝立て溝と考えられる。本層準もII層形成時に大部分が削平されている。本層準からは古墳時代前期や後期(5世紀末頃)の土器が産出したが、もっとも新しい土器型式から判断して古墳時代後期に併行する。

II層灰オリープ色を呈する砂質泥ないしは泥混じり砂質泥。団粒構造が顕著に認められる。B～D地区で本層準の拡がりを確認した。母材は明らかではないが、人為的に掻き混ぜて作られた畑作土層と考えられる。本層準からは古墳時代前期および後期、奈良時代後半～平安時代末の土器が産出した。いっぽう、I層はII層とは岩相に差異がないものの、酸化鉄の沈着が著しく褐色を帯びている。水平面ではB～D地区の北半部で南北幅7～10mにわたって拡がり、おおむね東西方向に連続している。産出遺物は古墳時代前期および後期、奈良時代後半の土器である。

これらの出土遺物から下層で出土した遺物と同時期のものを差し引くと、おそらく奈良時代後半が畑作土形成期と考えられ、その後平安時代末頃まで畑が営まれ



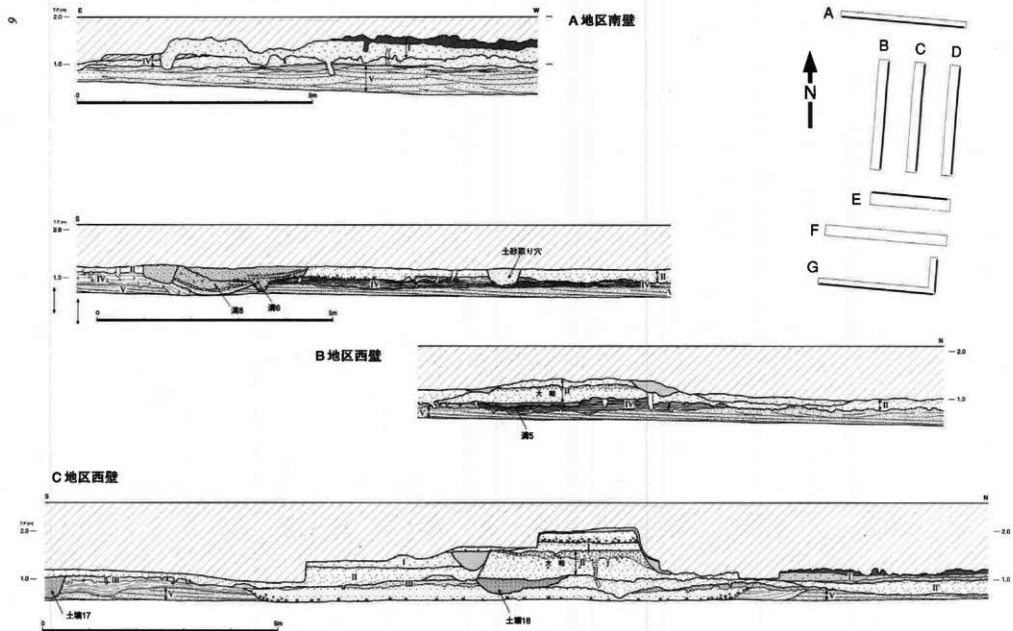
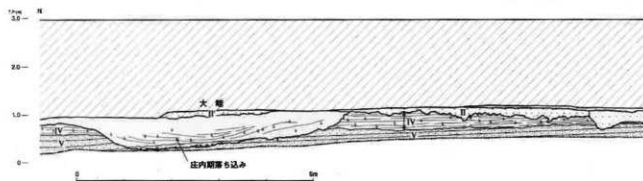
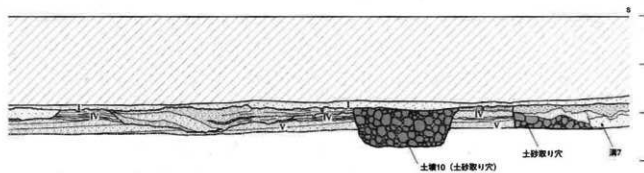


図 4.1 各調査区の地層断面図(1)



D地区東壁



E地区北壁

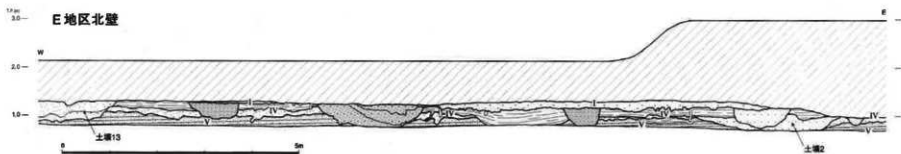


図 4.1 各調査区の地層断面図(2)

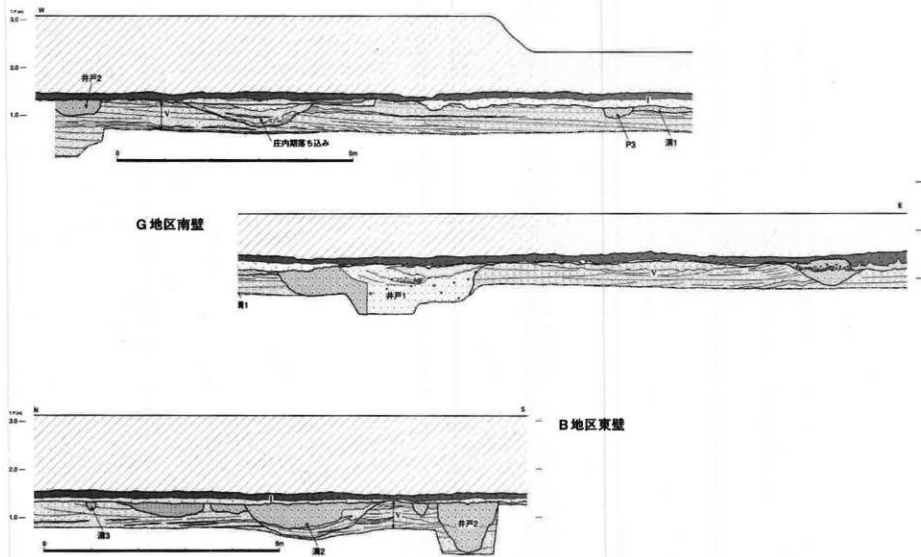


図 4.1 各調査区の地層断面図(3)

ていた。ただし、D地区のII、II'層間に建物跡と考えられる柱穴が検出されていることを考慮すると、この間一貫して畑地として利用されていたのではなく、断続的に畑地になっていたことがうかがえる。さらにII層が褐色を帯び長期間安定した状態で空気に曝されていたことや平安時代の土器が産出していないことから、畑地造成を終えて間もなくII層部分を比較的規模の大きい畦として利用し（以下「大畦」）、その後この部分に手が加わることはなかったことが示唆される。

この大畦は布施市史編纂委員会（1962）によって復元された想定条界線のうち仮定十条と同十一條境界の条界線に一致する。現代の空中写真にみられる地割りがすくさま条里制施行期の地割りと一致する保証はないが、大畦に手が加わられることはなく酸化鉄の沈着で著しく褐色を帯びていることや現代に至るまで大畦の上部が周囲より一段高かったことが考古学的に確かめられたことから、大畦は条里地割りに伴う条界線に相当する可能性が高く、当地における施行は奈良時代後半と考えられる。

I層はオリーブ灰色を呈する礫混じり砂質泥とその上位を被う灰色の礫混じり砂質泥からなる水田作土層。摩耗の著しい古墳時代～古代の土器に混じってガラス片やセメント片などが含まれ、現代の作土層と判断される。大畦の上方では一段高く盛り上がり、周囲との比高差は30～40cmである。なお、I層の上位には層厚1mの客土がみられる。

#### 参考文献

布施市史編纂委員会 1962 「布施市史」第一巻、578p.

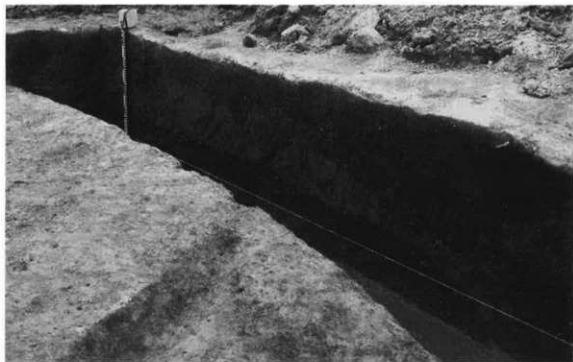


図4.2 B地区南端西部西壁断面。北東より撮影。



図 4.3 B地区溝6および8断面、南東より撮影。



図 4.4 B地区中央部西壁断面、断面上半にみられる砂が卓越する層は奈良時代後半以降の畑の作土と考えられる。南東より撮影。

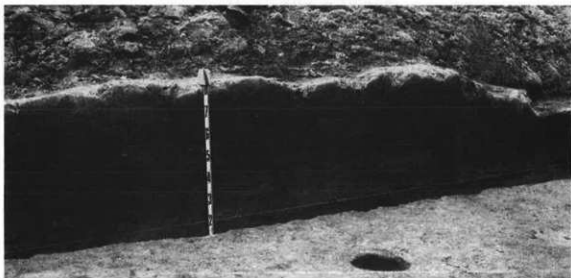


図 4.5 B地区西壁断面大畦、南東より撮影。

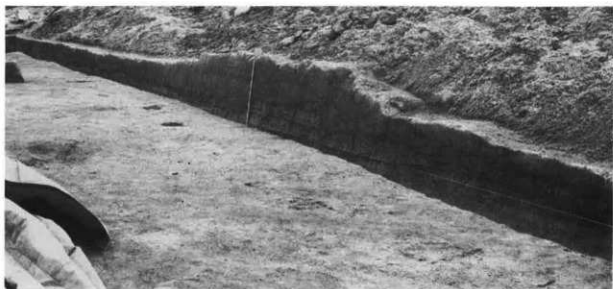


図 4.6 B 地区西壁断面，中央付近で盛り上がっているところが大畦，北東より撮影。

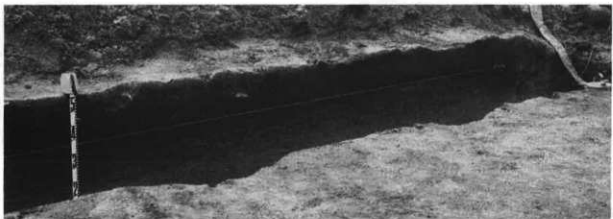


図 4.7 B 地区北端部西壁断面，南東より撮影。

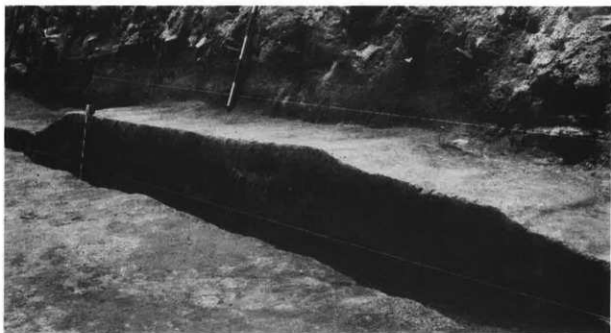


図 4.8 C 地区西壁断面大畦，北東より撮影。



図 4.9 C地区西壁断面大哇。南東より撮影。

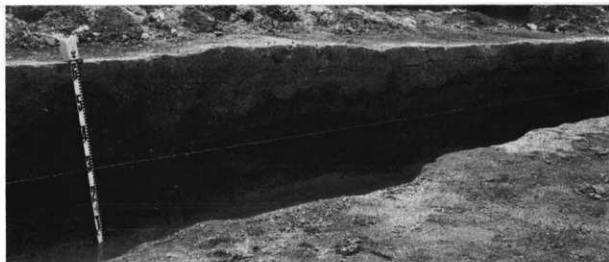


図 4.10 C地区西壁断面大哇。南東より撮影。



図 4.11 D地区西壁断面大哇～井戸6付近。南東より撮影。

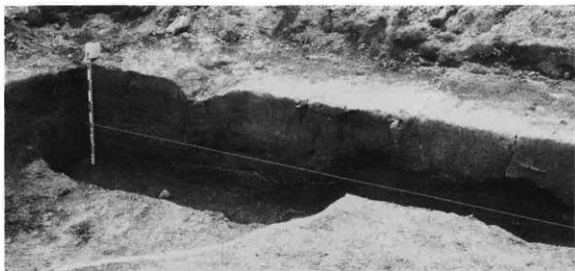


图 4.11 E地区北壁断面西端部，南東より撮影。

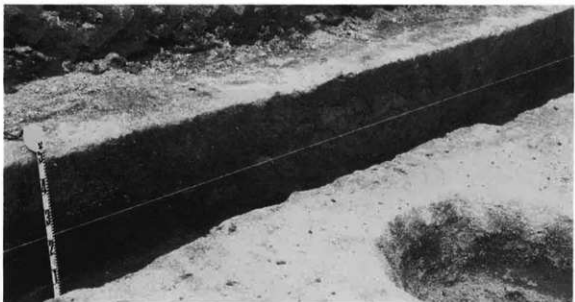


图 4.12 E地区北壁断面西半部，南西より撮影。



图 4.13 E地区北壁断面中央，南東より撮影。





图 4.14 G 地区南壁断面东半部，北西より撮影。



图 4.15 G 地区南壁断面西半部，北東より撮影。

## 第5章 遺構

本調査では古墳時代前期および後期、奈良時代末～平安時代末、中世の遺構を確認したが、ほぼ全地区にわたって同一面で検出した。これは古墳時代後期以降は堆積作用が顕著でなく層厚が薄いことや後世による下層の攪乱が著しいことから、それぞれの時期の遺構は生活面や機能面で検出したものではなく、大部分を後世の加工面で検出したことによる。また、検出した遺構にはより古い時期の土器が混入している例が多く、各遺構の時期決定には遺構の配列や特徴、埋土などを手がかりにした。

### ・古墳時代前期の遺構（図5.1）

層序学的には当該時期の遺構面を2面（古墳時代前期第1遺構面、同第II遺構面）確認できたが、水平面での分別は困難で、同一面で検出した。溝や土壌、柱穴、井戸がみられた。全域に拡がって分布しているが密度は低い。井戸の存在から調査地点には居住域があったと想像され、本来はより高密度に拡がっていた遺構群が後世に削平された可能性が高い。

井戸7は長軸2.4m、その直交軸1.8m、検出面から深さ50cmを測り、楕円形の平面形状をもつ（193）。井戸の堀形は比較的広くとられ、中心では井戸枠として利用された削り抜き材を検出した。井戸堀方および井戸枠内からは古墳時代前期の二重口縁壺など、同時期の土器が出土した。ピット128では小型丸底壺4点と高杯が出土し（257）、小型丸底壺には意図的な穿孔がみられることから埋納遺構と考えられる。

### ・古墳時代後期の遺構（図5.2）

とくに調査地の南半で高密度で遺構を検出した。溝や土壌、柱穴、井戸がみられた。G地区のピット18、15、14、13、12、21のように弧状に並ぶ柱穴群もみられるが、全体的な傾向としては柱穴や溝は北西～南東、北東～南西方向に主軸をもつ。井戸2は緩やかな逆凸地形形状の断面形態をもち、直径2m以上、検出面からの深さ1.2mの素掘えい井戸で、古墳時代前期の土器および同後期の須恵器や土器が出土した（36,85）。

### ・奈良時代後半～平安時代末（図5.3）

土壌や柱穴、井戸がみられた。また、B～D地区北半部では条界線と考えられる東西方向にのびる幅7～10mの大畦を検出した（184,263）。条里界線に相当する畦だけに限らず地割り境界の畦は、御溝の敷設や意図的な田畑地の拡大によりたびたび掘削され、条里制施行当初の形状や位置を保っているとは考えにくい。B～D地区で検出した大畦についても地区ごとに褐色を帯びた部分の分布幅はまちまちで、このことを反映しており、本調査地のみの狭小な範囲内では正確な主軸方向を確定することはできない。条界線相当の大畦の主軸方向については東西の隣接地や周辺での調査成果を考慮したうえで決定したい。

井戸6は直径2.5m以上の堀形で中心に四方を板で囲った井戸枠をもち、検出面からの井戸枠底までの深さは1.2mを測る（148,149）。井戸枠は井戸機能中に土圧を受けてズレなど変形を生じていたと考えられ、それらを補強するための材が認

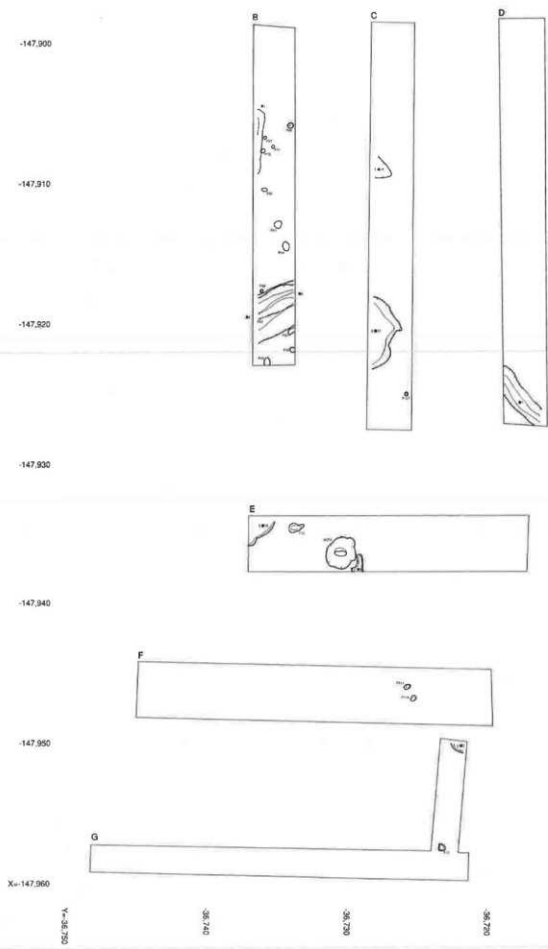


図 5.1 古墳時代前期の遺構分布。

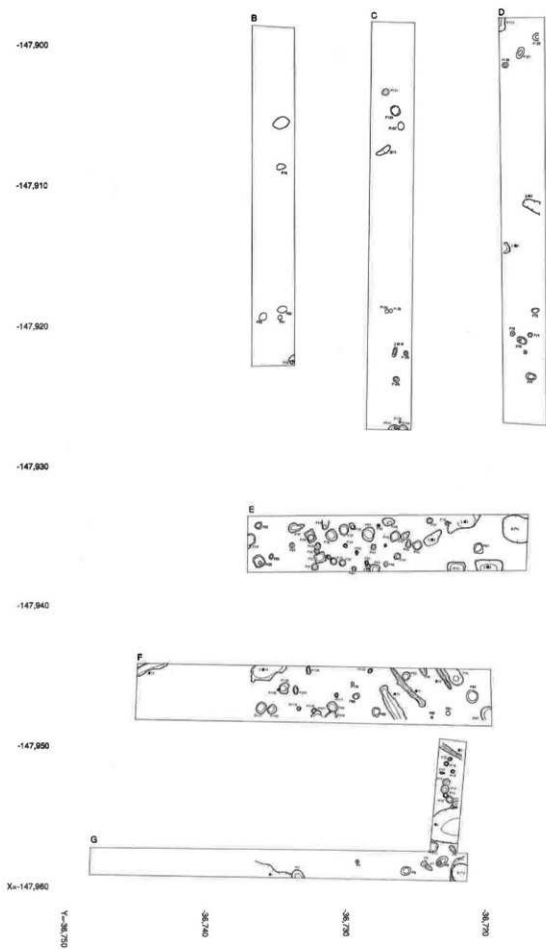


図 5.2 古墳時代後期の遺構分布.

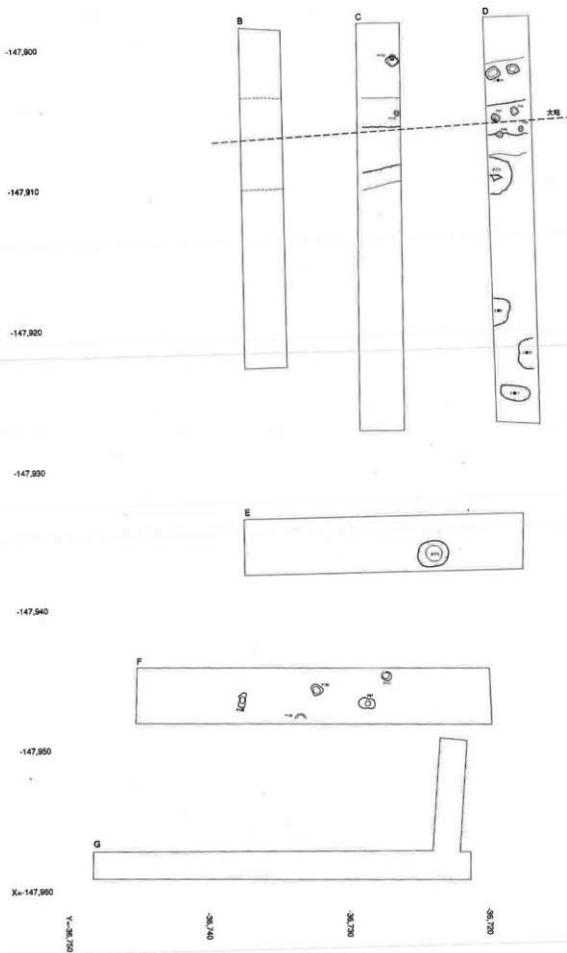


図 5.3 奈良時代後半～平安時代末の遺構分布。

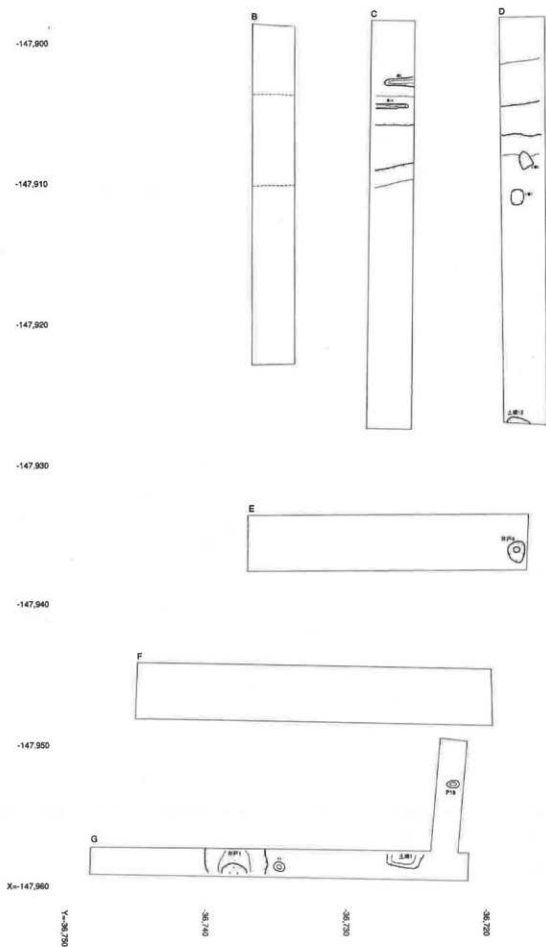


図 5.4 中世の遺構分布.

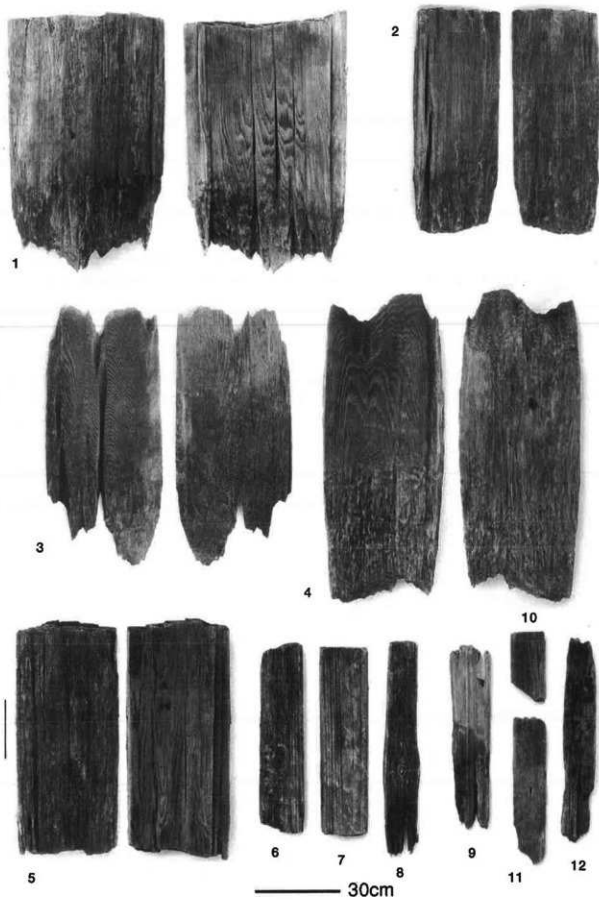


図 5.5 井戸 6 井戸枠材 (1~5) とその補強材 (6~12).

められる。

いっぽう、C,D地区の大畦上には柱穴や土壌がみられ(184,263)、層序学的には大畦がこれらの遺構に先行する。これらの遺構のうちピット85,86,87,88は建物の柱穴と考えられる。また、本報告では固化を怠ったがD地区の西壁断面では井戸6が大畦に先行していることを記録している。さらに、B地区のII層(畑作土層)からは口縁部を欠いた奈良時代後半の須恵器の長頸壺が出土したが(83)、同じ畑作土から出土した土器は人為的な攪拌が繰り返され細片になったものが多いにもかかわらずこの土器だけは非常に残存状態が良いことから、畑作土形成以前に遺構の中に埋められていた可能性が高い。これらのことは調査地点付近が古代に入植が始まった当初から畑地として利用されていたのではなく、奈良時代後半当初まではおそらく居住地があり、その後畑地として転用されたが、奈良時代後半のある時期に再び居住地として、その後また畑地として利用されていた。つまり、奈良時代後半から平安時代末にかけて居住地と畑地が交互に繰り返されていたことがうかがえる。

#### ・中世の遺構(図5.4)

多くの遺構は現代の水田作土によって破壊されたと考えられ、規模の大きい遺構が散在するのみである。

井戸1は平面 $4.5\text{m} \times 2\text{m}$ 以上で、検出面からの深さは $1\text{m}$ 以上である(8,25)。中心には直立状態の杭がみられ、井戸枠が設けられていたと考えられる。瓦質福鉢や羽釜、瓦などが出土した。

井戸4は $1.6\text{m} \times 1\text{m}$ の楕円形の平面形状をもち、検出面からの深さは $80\text{cm}$ を測る(116,189,191)。曲物を井戸枠に転用している。須恵器や瓦などが出土した。



図5.6 井戸4の井戸枠に転用された曲物。

図5.7 A地区で検出した昭和50年代まで存在した池の跡。A地区の大部分は池を埋め立てたときの土砂に覆われていた。東より撮影。







図 5.8 B 地区遺構検出状況。南より撮影。

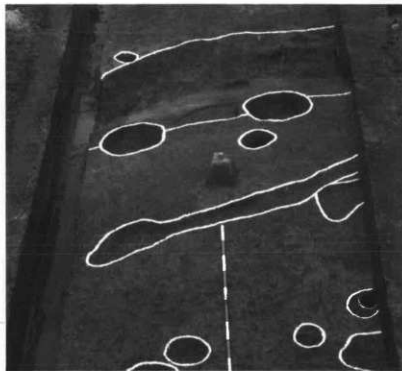


図 5.9 B 地区南端部遺構検出状況。奥の溝が溝 6。南より撮影。



図 5.10 B 地区溝 8 完掘状況。西より撮影。

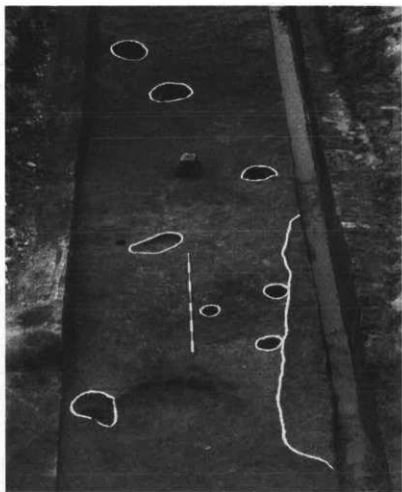


図 5.11 B 地区中央部遺構検出状況。北より撮影。

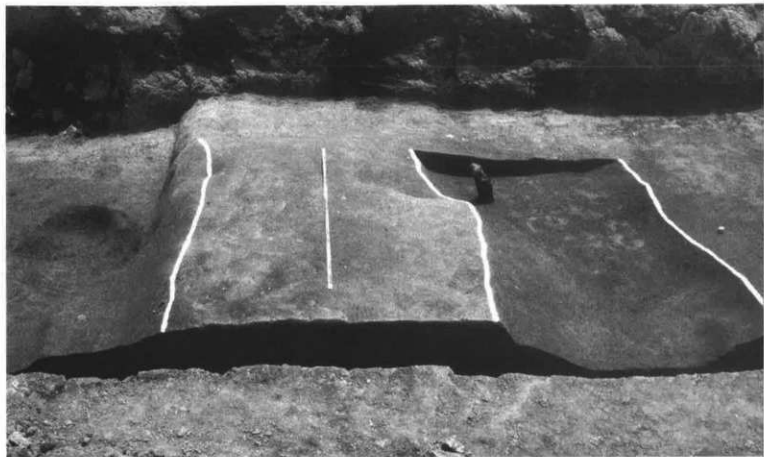


図 5.12 B地区で検出した条界線相当の大畔。西より撮影。



図 5.13 B地区ピット 64 完掘状況。僅かに柱の痕跡がみられる。



図 5.14 B地区の畑作土層(II層)から出土した須恵器長頸壺。おそらくは遺構の中に埋没していたものだろう。

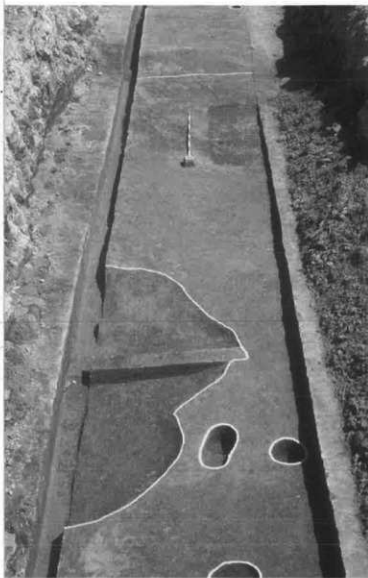


図 5.15 C地区南半部遺構検出状況。南より撮影。



図 5.17 C地区北半部で検出した溝6とピット133  
および137。北東より撮影。

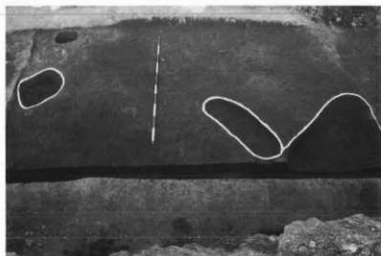


図 5.18 C地区北半部の大畦の下位で検出した遺  
構。西より撮影。



図 5.16 C地区北半で検出した大畦と周辺の遺構。北東より撮影。

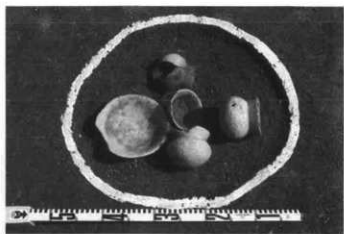


図 5.19 C地区ピット128内小型精製土器出土状況。

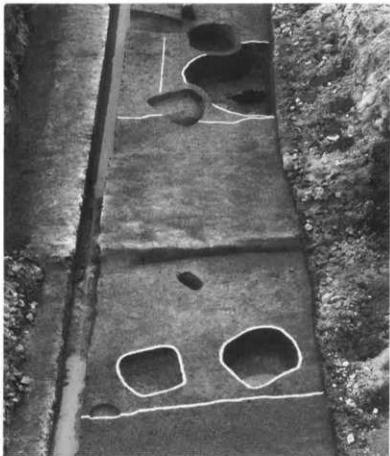


図 5.20 D地区北半部遺構検出状況。北より撮影。



図 5.21 D地区南半部遺構検出状況。南より撮影。



図 5.22  
D地区北端部遺構検出状況。中央付近で盛り上がっているところが大畦畔。南東より撮影。



図 5.23  
D地区井戸6内井戸枠検  
出状況。東より撮影。

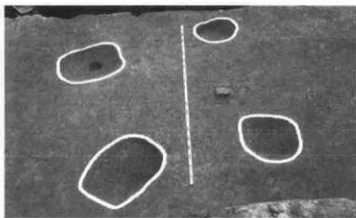


図 5.25 D地区北端部柱穴完掘状況。手前より  
P87,88,85,86。西より撮影。



図 5.24 D地区井戸6堀形半截状況。



図 5.26 D地区IV層内庄内土器出土状況 (1)。



図 5.27 D地区IV層内庄内土器出土状況 (2)。



図 5.29 E地区西半部遺構検出状況。西より撮影。



図 5.28 E地区東半部遺構検出状況。西より撮影。



図 5.30

E地区東端部遺構検出状況。写真下左が井戸4、同右が井戸5、写真上の大きい遺構が井戸3。東より撮影。

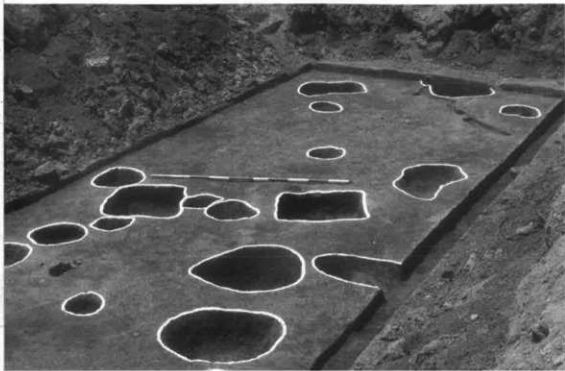


図 5.31  
E 地区東半部遺構検出状況。この付近の柱穴群は N30W とそれに直交する N60E に並ぶ傾向がみられる。

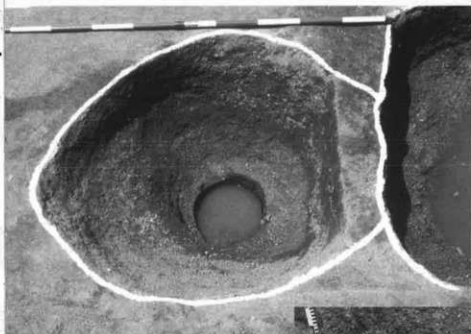


図 5.32 E 地区井戸 4 完掘状況。中央には井戸枠に利用された曲物がみられる。東上より撮影。



図 5.34  
E 地区井戸 4 井戸枠内遺物出土状況。

図 5.33  
E 地区井戸 4 井戸枠検出状況。井戸枠は曲物が転用されたもの。





図 5.35 E地区井戸7堀形埋土断面および井戸枠内遺物出土状況。井戸枠には木を刺り抜いたものを使用していた。

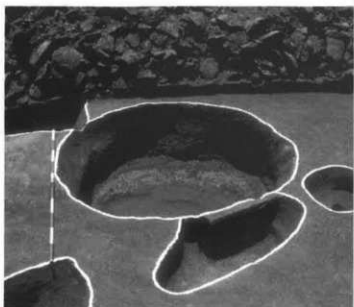


図 5.36 E地区中央付近遺構検出状況。写真中央の円形の遺構が井戸3。北より撮影。



図 5.38 F地区中央～東半部遺構検出状況。西より撮影。

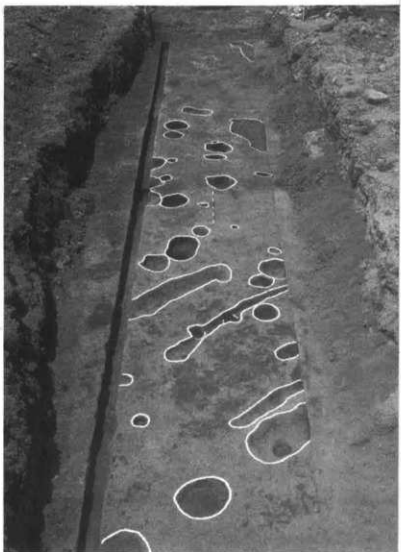


図 5.37 F地区遺構検出状況。西より撮影。





図 5.39 F地区中央部遺構検出状況。北東より撮影。

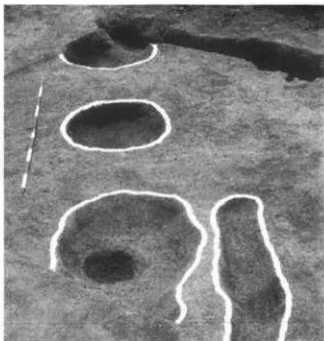


図 5.40 F地区東端部柱穴列検出状況。手前よりピット95,90,89。北より撮影。



図 5.41 G地区東西トレンチ遺構検出状況。写真下の遺構が井戸1。北西より撮影。

図 5.42

G 地区南東隅付近遺構  
検出状況。写真上の遺構  
が井戸2。北西より撮影。

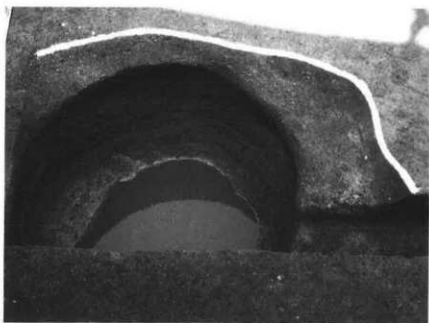
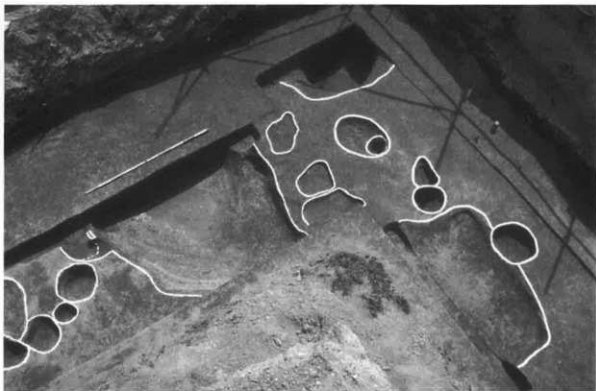


図 5.43 G 地区井戸 2 完掘状況。東上より撮影。

図 5.44 G 地区井戸 2 断面。西より撮影。

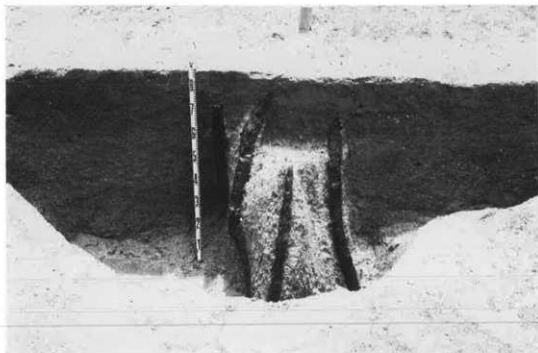


図 5.45  
G地区井戸1堀形断面および  
井戸枠支柱。井戸枠内部は粗  
い砂によって充填されてい  
る。北より撮影。

図 5.46  
G地区南北トレンチ溝2断面。



図 5.47  
G地区IV層内庄内土器出土状況。

## 第6章 遺物

今回の調査では古代および古墳時代前期の遺物が多く出土し、中世および古墳時代中期～後期の遺物が少量出土した。

中世の遺物では土師器、瓦器、陶器、瓦などが出土した。それらの遺物は、G地区井戸1出土の図6.65のように、微細で出土量も少ない。E地区井戸4の出土遺物もほぼ同様の傾向を示している。本調査地は9世紀後半以降、耕作地として利用されてきたため、当該期の出土遺物は細片で出土量も少なく、それらが濫用の井戸に廃棄されたものと思われる。

古代の遺物は平安時代の作上層である第II層、大畦、作土層上面より掘り込まれた遺構から検出されており、土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦、製塩土器、竈などが出土した。

平安作土層出土遺物には図6.3・6の須恵器壺、土師器甕のように遺存状態のよい8世紀後半の遺物が含まれている。このことは本調査地が当時、居住空間であったことを示すものと思われ、それらの遺物が8世紀後半～末の耕作地化によって攪拌されて平安作土層に再堆積したものと推測される。図6.4・5に示した瓦は中心飾りの左右に各2本のキズが認められる。今回の調査で出土した瓦は、この軒平瓦1点を除くといずれも平瓦で、図6.60・67に示したE地区井戸4とG地区Pit6出土の瓦には凹面に布目、凸面に縄目が認められる。

大畦の下部からの出土遺物には、8世紀後半～末の平城



図6.3 B地区平安作土層出土須恵器壺、土師器甕



図6.4 B地区平安作土層出土瓦

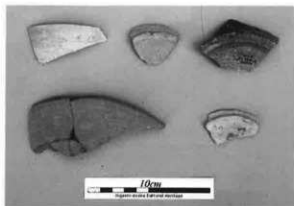


図6.1 B地区平安作土層出土須恵器杯、土師器蓋・椀

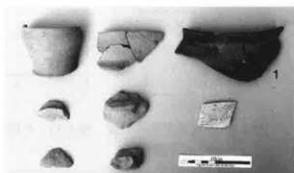


図6.2 B地区大畦出土須恵器壺、土師器甕・把手、緑釉碗、瓦器椀

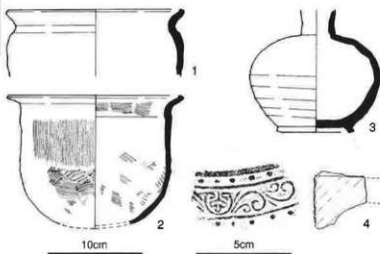


図6.5 B地区古代土器・瓦実測図

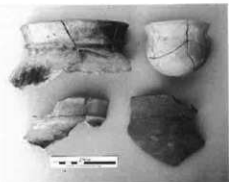


图 6.6 B 地区满 6 出土土師器甕・小型丸底壺



图 6.7 B 地区满 8L 出土土師器甕・高杯・鉢



图 6.8 B 地区满 8L 出土土師器甕

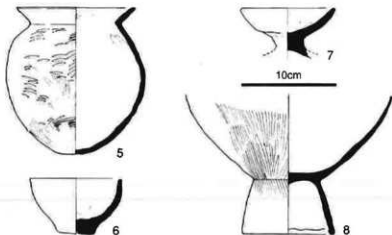


图 6.10 B 地区古墳時代土器実測図



图 6.9 B 地区平安作土層出土土師器台付鉢

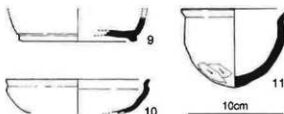


图 6.11 C 地区古代土器実測図



图 6.12 C 地区大哇出土土師器甕



图 6.13 C 地区大哇出土須惠器杯・蓋・壺、土師器蓋・把手、製塩土器



图 6.14 C 地区平安作土層出土須惠器杯、土師器杯・蓋・綠釉碗、製塩土器



图 6.15 C 地区土坑 18・Pit131 出土須惠器杯・高杯・蓋



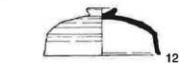
图 6.16 C地区土墳17  
出土土師器甕



图 6.17 C地区土墳17・溝14出土  
土師器高杯・小型器台・甕



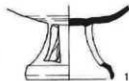
图 6.18 C地区包含層  
出土土師器高杯



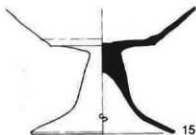
12



13



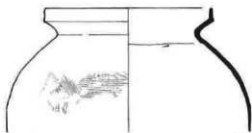
14



15

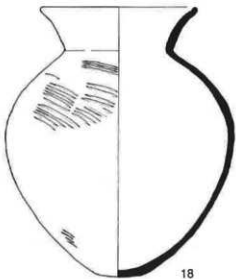


16



17

20cm



18



16

图 6.19 C地区包含層  
出土土師器甕



17

图 6.20 C地区包含層出土  
土師器甕・高杯

图 6.21 C地区古墳時代土器実測図



21

22

20

19

图 6.22 C地区 Pit128 出土土師器小型丸底壺



23

图 6.23 C地区 Pit128  
出土土師器高杯

京～長岡京の時期の細片が多い。そのためこの頃に大睦が築かれ、本調査地が居住域から耕作地に転換されたものと思われる。なお図6.2・5のB地区出土土師器甕は大睦出土の他の遺物よりやや新しく9世紀中頃以降のものと思われ、このほかにも大睦の上部からは瓦器碗の細片も1点出土している。これらの遺物は、8世紀後半の大睦築造後も、継続して盛り土などの補修が行われてきたことを示している。

平安作土層上面から掘り込まれた遺構では、F地区Pit97から図6.63・64に示した黒色土器碗が出土している。この黒色土器碗は、内面にのみ炭素を吸着させたタイプで、胎土には角閃石を含み、9世紀後半頃のものと思われる。図6.28・31のD地区井戸6出土の土師器碗、図6.63・64のF地区Pit103出土の土師器杯もほぼ同様の時期であろう。これらの遺物の出土状況から、8世紀後半の平城京～長岡京の時期に耕作地として利用され始めた本調査地が、平安時代に入って程なく建物が建ち並び井戸が掘削された居住空間となり、それらの建物や井戸が9世紀後半に廃絶して再び耕作地になったものと推測される。

古墳時代中期の遺物では図6.15・21に示したC地区土壙18とPit131出土の須恵器、後期の遺物では図6.32～34に示したD地区溝7出土の須恵器と土師器、図6.62に示したF地区出土の須恵器などがある。これらの遺物は、8世紀後半の耕作地化に伴う削平が著しいため、大睦の下部などにわずかに遺存していた遺構から検出され、出土量も少ない。図6.33の砥石は砂岩製で、3面を砥面として使用された痕跡が残る。

古墳時代前期の遺物は土師器、製塩土器、土鍾、円盤状土製品、砥石、剃片、粘土塊などが第V層とその上面から掘り込まれた遺構より出土している。

第V層からは図6.42に示したような庄内甕が出土している。庄内甕は図6.35・36のようにD地区第V層上面で検出された落ち込みなどからも出土している。図6.22～24のC地区Pit128出土の小型丸底壺4点と高杯1点の一括出土遺物は、他の古墳時代前期の遺物よりもやや新しく、このうちの小型丸底壺1点には、ヘラ描きの記号と穿孔が認められる。この他にも図6.6のB地区溝6、図6.7のB地区溝8 L、図6.16・17のC地区土壙17、図6.50～52のE地区井戸7、図6.53のE地区Pit151、図6.68・69のG地区溝2などからも完形品を含む土器の一括出土があった。

これらの土器には他地域産の土器が多く含まれており、図6.6のB地区溝6出土

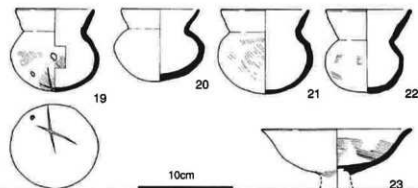


図6.24 C地区Pit128  
土師器実測図



图 6.25 D地区平安作土層・大哇出土土師器  
鍋・須惠器蓋、土錘、石器



图 6.26 D地区平安  
作土層出土土師器甕



图 6.27 D地区井戸7出土  
製埴土器



图 6.28 D地区井戸6・堀方出土土師器  
皿・杯、須惠器杯・高杯・壺、瓦、粘土塊



图 6.29 D地区井戸6  
出土土師器壺

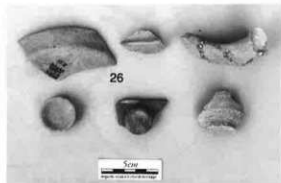


图 6.30 D地区土墳6・11・17出土  
土師器皿・把手、須惠器杯・蓋・壺

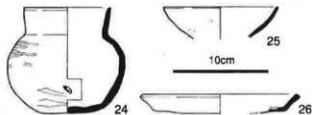


图 6.31 D地区古代土器実測図

图 6.32 D地区溝7出土須惠器杯・蓋・高杯



图 6.33 D地区溝7出土土師器  
羽釜・把手、土錘、砥石



图 6.34 D地区溝7出土土師器壺・甕・鉢



图 6.35 D地区落込み  
出土土師器甕



图 6.36 D地区落込み  
出土土師器甕



图 6.37 D地区落込み  
出土土師器壺



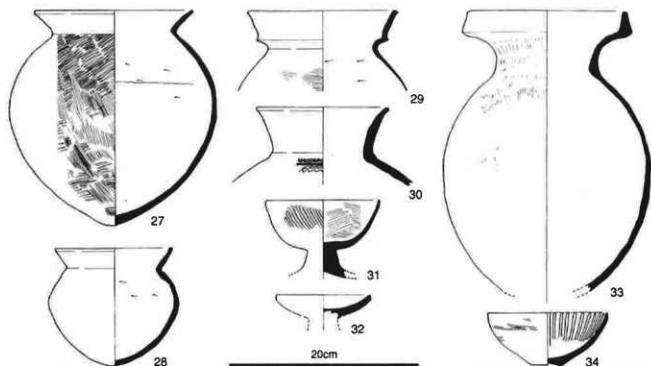


图 6.38 D地区古墳時代土器実測図

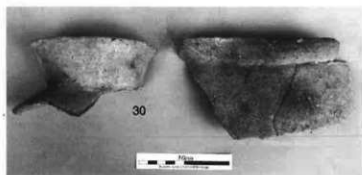


图 6.39 D地区落込み出土土師器甕

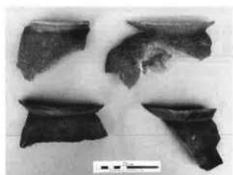


图 6.40 D地区落込み出土土師器甕



图 6.41 D地区包含層出土土師器甕



图 6.42 D地区包含層出土土師器甕

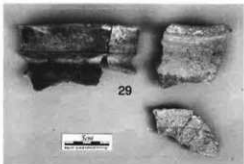


图 6.43 D地区包含層出土土師器甕

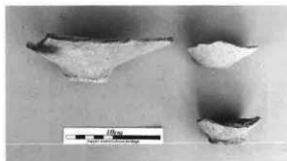


图 6.44 D地区包含層出土土師器甕



图 6.45 D地区包含層出土土師器高杯



图 6.46 D地区包含層  
出土土師器高杯



图 6.47 D地区包  
含層出土土師器高  
杯·小型器台·鉢



图 6.48 D地区包含層  
出土土師器高杯



图 6.49 D地区包含層出土  
円盤状土製品、土鉢、不明

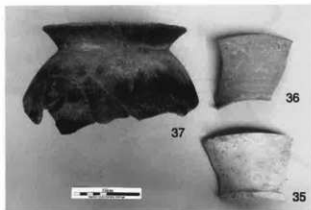


图 6.50 E地区井戸7  
出土土師器甕、壺



图 6.51 E地区  
井戸7出土土師器甕

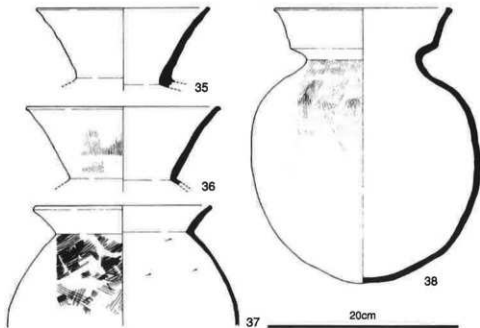


图 6.52 E地区井戸7  
出土土師器実測図



图 6.53 E 地区 Pit51  
出土土師器甕·甕



图 6.55 E 地区包含層  
出土土師器甕



图 6.57 E 地区包含層  
出土土師器高杯



图 6.54 E 地区 Pit24·28·  
32·36·44 出土土師器甕



图 6.56 E 地区包含層  
出土土師器鉢



图 6.58 E 地区包含層出土  
土師器甕·鉢·高杯



图 6.59 E 地区包含層  
出土土錘、石器

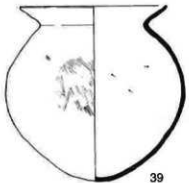


图 6.61 E 地区土師器实测圖

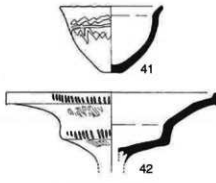


图 6.63 F 地区  
古代土師器实测圖



图 6.60 E 地区井戸 3·4  
出土瓦、須惠器杯·甕



图 6.61 E 地区土師器实测圖

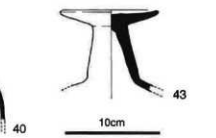


图 6.63 F 地区  
古代土師器实测圖

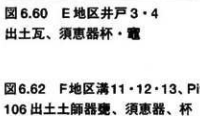


图 6.62 F 地区 溝 11·12·13、Pit102·  
106 出土土師器甕、須惠器、杯

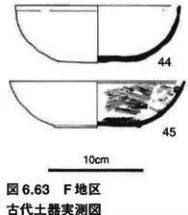




图 6.64 F地区 Pit97·103  
出土黑色土器碗、土器器杯

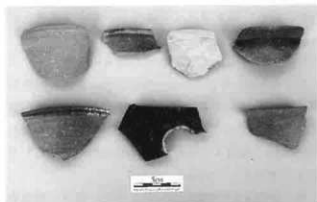


图 6.66 G地区井戸2出土須惠器壺・甕、  
土器器甕、不明

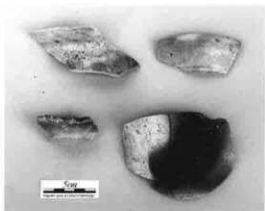


图 6.68 G地区溝2出土土器器甕・鉢・  
高杯

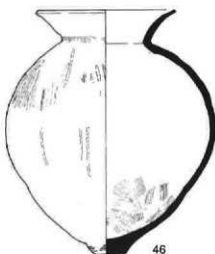


图 6.71 G地区古墳時代土器実測図

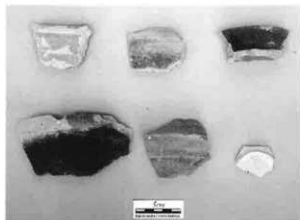


图 6.65 G地区井戸1出土瓦質羽釜・撞鉢、  
瓦器碗、陶器撞鉢・甕



图 6.67 G地区 Pit1·2·3·16出土瓦、  
砥石、土器器皿、円盤状土製品



图 6.69 G地区溝2出土  
土器器鉢



图 6.70 G地区土溝2  
出土土器器甕



图 6.72 G地区包含層  
出土土器器甕

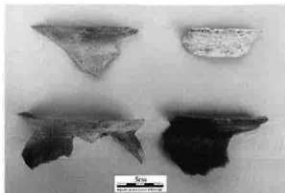


図 6.73 G 地区包含層出土土師器甕



図 6.74 G 地区包含層出土土師器甕

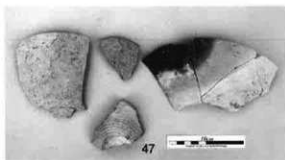


図 6.75 G 地区包含層出土土師器甕・高杯・  
小型器台

山陰系甕、図 6.9・10 の包含層出土東海系台付甕、図 6.43 の包含層出土吉備系と山陰系甕、庄内甕と共伴した図 6.37 の D 地区落ち込み出土の四国または西部瀬戸内系の壺、図 6.54 の E 地区 Pit32 出土の東部瀬戸内系甕などが認められる。また図 6.56・57・61 に示した第 V 層出土の鉢や高杯のように施文が残る土器も散見される。

土鍾は後世の攪乱を受けて 2 次堆積したものを含めて 7 点出土した。長さ 6.5cm・外径 3.3cm・内径 1.1cm 前後の円筒形のものが多く、図 6.25 に示した長さ 6cm・外径 2.9cm・内径 0.6cm 程で楕円形状の小型品が 2 点、図 6.59 に示した長さ 11cm・外径 5.8cm・内径 4.3cm の大型の円筒形で角閃石を多く含む土鍾 1 点が出土している。

円盤状土製品は図 6.49・67 に示したように、後世の攪乱を受けたものを含めて 2 点出土している。共に土師器の体部を直径 5cm 程に打ち欠いている。

## 第7章 意岐部遺跡第5次調査出土材の放射性炭素年代

パリーノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

今回の分析調査では、意岐部遺跡第5次調査で確認されている5世紀末に併行する柱穴、奈良時代末～平安時代初頭に併行する井戸から出土した材について放射性炭素年代測定を行い、遺構の年代観に関する情報を得る。

### 1. 試料

試料は、意岐部遺跡第5次調査において、5世紀末の柱穴から出土した柱材1点（試料名：OKB-1 14C-1）、奈良時代末～平安時代初頭の井戸枠材1点（試料名：OKB-5 14C-2）と井戸枠の補強材1点（試料名：OKB-5 14C-3）である。これらの試料のうちOKB-5 14C-2とOKB-5 14C-3の樹種は、2点とも針葉樹のヒノキに同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

### 2. 分析方法

測定はベンゼン合成による液体シンチレーション法を用いた。以下にその過程を述べる。

#### 1) 前処理

水でよく洗浄して表面の異物を取り除いた。乾燥、粉碎後、水酸化ナトリウム溶液を加えて煮沸した。煮沸後の水酸化ナトリウム溶液は傾斜法で除去した。この水酸化ナトリウムの処理は、除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返した。次に塩酸を加えて煮沸し、塩酸は水で充分洗い流した。この試料を乾燥後、蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼させて二酸化炭素とし、アンモニア水に捕集した。これに塩化カルシウムを反応させ、純粋な炭酸カルシウムを回収した。

#### 2) 測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン5ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して5mlとした）にシンチレーターを0.075g加えたものを測定試料とした。

#### 3) 測定

測定は、1回の測定時間50分間を繰り返し行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料を一緒に測定した。

#### 4) 計算

放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用した。

### 3. 結果

測定結果を表7.1に示す。3点のうちOKB-5 14C-1とOKB-5 14C-2の2点は1500～1600年前頃の年代を示し、OKB-5 14C-3は約1900年前の年代を示す。

なお、これらの測定年代は、表示されている誤差の他にも測定方法自体に起因する測定値のバラツキや、測定の前提条件である大気中の<sup>14</sup>Cの濃度が過去において一定ではなかったことなどから、年輪などから測定されたいわゆる暦年代とは一致しない。放射性炭素年代と暦年代とのずれは、古くなるほど大きくなるということがいくつかの分析例で出されているが、例えば数千年前では500～800年ほど放射性炭素年代の方が若い傾向を示す(中村, 2000)。今回測定された1500年前頃では、東村(1990)にある年輪年代のデータでは100年程度のずれが認められ、中村(2000)に掲載されている Stuiver and Reimer の校正曲線でも2000年前から1700年前の間で最大100年程度のずれである。これらのことから、上記の年代を暦年に補正したとしても最大で100年程度しか動かない。

表7.1 放射性炭素年代測定結果

試料番号	試料の質	樹種	年代値BP	Lab.No.	出土遺物からみた時代観
OKB-5 14C-1	材	—	1640±100	PAL-775	5世紀末
OKB-5 14C-2	材	ヒノキ	1480±80	PAL-776	奈良時代末～平安時代初頭
OKB-5 14C-3	材	ヒノキ	1910±80	PAL-777	奈良時代末～平安時代初頭

(1)年代値: 1,950年を基点とした値。

(2)誤差: 測定誤差 $\sigma$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

(3)PAL: パリ・ナ・ゲイ株式会社で測定。

### 4. 考察

5世紀末の柱穴から出土した柱材の測定年代は、1640±100BPを示した。測定値は、供伴する遺物の時代観と調和する結果となっている。

これに対して、奈良時代末～平安時代初頭の井戸枡材と補強材2点の年代値は、それぞれ1480±80BPと1910±80BPであり、測定値に差があった。また、単純に1950年から遡った年代では、供伴する遺物の時代観よりも300～700年古い値となっている。前述した暦年とのずれを考慮しても、測定年代が示す年代は古墳時代頃を示している。このような結果は、井戸枡構築材の樹種や由来に関係している可能性がある。測定した構築材の樹種はヒノキであったが、本種は条件が良ければ樹齢数百年まで成長する。ここでのヒノキ材が、そういった老齢木の心材に近い部分に由来するとすれば、今回のような結果になる可能性がある。また、井戸枡の構築材に古木を利用している可能性や、転用材の利用の可能性も考える必要があり、井戸枡材と補強材での年代差も、これらの要因に起因する可能性がある。井戸構築材の年代については、各部材の特徴など、発掘調査時の調査成果と合わせた評価が必要である。

### 引用文献

- 東村武信(1990)考古学と物理化学, 212p., 学生社.  
中村俊夫(2000)14C年代から暦年代への校正. 日本先史時代の14C年代, p.21-40, 日本第四紀学会.

## 報告書抄録

ふりがな	てんばけんせつにともなうおきべいせきだいがいはくつちょうさほうこくしょ
書名	店舗建設に伴う意岐郡遺跡第5次発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	井上伸一/別所秀高/バリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	財団法人東大阪市文化財協会
発行機関	財団法人東大阪市文化財協会
発行年月日	2002.6.30
作成法人ID	42170
郵便番号	577-0843
電話番号	06-6736-0346
住所	東大阪市荒川3-28-21
ふりがな	おきべいせき
遺跡名	意岐郡遺跡
ふりがな	ひがしおおさかしにしいわたさんちょうめ
遺跡所在地	東大阪市西岩田3丁目113～121, 135, 956番地他
市町村コード	27227
遺跡番号	79
北緯	GRS 84
東経	GRS 84
調査期間	2001.04.26-2001.05.31
調査面積	664
調査原因	店舗建設工事
種別	集落跡/畑地/条界線畦
主な時代	古墳/奈良/平安/中世
遺跡概要	古墳前期・柱穴+井戸+土壇+溝・古式土師器+土鍾/古墳後期・柱穴+土壇+竝立て溝・須恵器+土師器/奈良後半・畑地+条界線畦・須恵器+土師器+瓦/奈良後半～平安時代・柱穴+井戸+土壇+溝・須恵器+土師器+瓦・木製井戸枠/中世・井戸+柱穴・土器+陶器+瓦器
特記事項	大畦は河内國若江郡の条里地割りのうち、条界線に相当する可能性が高い。当地における条里地割りの施行は奈良時代後半に遡る。



---

**店舗建設に伴う  
意岐部遺跡第5次発掘調査概要報告書**

発行年月日 2002年6月30日  
発行 財団法人東大阪市文化財協会  
〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21  
印刷 株式会社ダイニチ  
〒553-0003 大阪市福島区福島5丁目15-13

---